日本産業衛生学会九州地方会ニュース

産衛九州

発行所　日本産業衛生学会九州地方会
〒890-8520
鹿児島県鹿児島市桜ヶ丘８丁目35-1
鹿児島大学医学部衛生学講座
TEL(099)275－5291
FAX(099)265－8434
発行責任者：地方会長　松下敏夫

（題字　倉恒匡徳筆）

地方会長を退任するにあたって

日本産業衛生学会九州地方会長　**松　下　敏　夫**
（鹿児島大学医学部衛生学講座　教授）

地方会長をお引き受けして早くも３年が経過し、４月１日を以て新会長へ地方会の舵取り役をバトンタッチすることになりました。この間、理事の役割分担の確立によって、本地方会の懸案事項であった問題のいくつかが具体化出来たことは大変有り難いことでした。とりわけ、会員をつなぐ情報紙として待望久しかった「産衛九州」の年２回発行の定着化が、三角順一編集委員長のもとで達成されたことと、酒井淳・二塚信担当理事を始め、関係各位のご尽力によって、計らずも、本年２月の日本産業衛生学会創立70周年を期して、「九州地方会史」を発刊する運びとなったことは、特筆すべきことでした。

研究・教育・社会的活動など、日常の多忙な生活の中で、貴重な時間を割いてこれらの成功のために尽力してこられたみなさんに、この紙面をお借りして、改めて心から感謝を申し上げます。

願わくば、この情報誌が、会員の「参加」により、相互の意見・情報交換の場として活用され、また、九州地方会史編纂に関しては、「温故知新」、先人たちのまさに血と汗の結晶の中から、歴史的な貴重な教訓を学び取り、将来への展望の礎石とされることを、期待したいと思います。

折しも、本年の第73回日本産業衛生学会総会は、大久保利晃企画運営委員長のもとで、北九州で開催されます。この学会の成功のために、本地方会の皆さんが積極的に協力して頂くと共に、この学会の九州での開催を活用して、その中から、多くのものを学びとり、九州地方会を益々発展させて頂くことをお願いして、退任のご挨拶と致します。ご協力、誠に有難うございました。

平成10年度日本産業衛生学会九州地方会を終えて

産業医科大学　**大久保　利　晃**

産業医科大学が九州地方会のお世話をするのは、平成５年に児玉教授が開催されて以来５年ぶりのことであった。会場は前回と同じラマッチーニ小ホールを用いた。違いといえば、コンピュータからの直接投影ができるようになったくらいで、後は本年度の総会もその時とほぼ同様の環境で行われた。

会費納入ベースでの参加者数は153名で、年々参加者数が増加傾向にあることは喜ばしい限りである。発表演題数は28題でそれほど多くはなかったが、私はあえてそれ以上出題を募ることはしなかった。というのも、全国総会の最近の傾向をみると、会員数の増加を反映して演題数が増加し、同時並行の会場数があまりにも多くなりすぎているので、益々いわゆる専門馬鹿になるきらいがあることを心配している。地方会くらいは一会場にすることにより、昔のように、自分の専門以外の発表も聞けるということが、特に若い会員たちにとって良いことではないかと考えている。

発表内容としては、最近の産業学会の傾向を反映して、中毒、環境管理などより、健康教育、産業保健など現場活動に立脚したものがやや多かった。しかし、レパートリーとしては、すそ野は広く、まさに上記の目的に適合するものであった。

ただ、残念なことは昨年の試みに引き続き、今年も前日に自由集会の呼びかけを行ったが、申し込みは１件もなく、結局開催できなかったことである。自由な雰囲気で少しつっこんだ議論をすることも重要ではなかろうか。幸、今年の熊本でも自由集会を企画していただいているようなので、この機会を利用して意義を強調させていただきたい。

本部理事会報告

産業医科大学　大久保　利　晃

前号以降の理事会は、昨年10月31日に1回開催されただけなので、私の把握している限り、その後の経過を含めて主要事項をご報告することにしたい。

先ず、産業医産業看護全国協議会であるが、今年は10月22、23両日仙台市で、又来年については、北陸甲信越地方の担当で（都市名、日程は未定）、それぞれ開かれることになっている。今年の専門医試験では20名が受験し、全員合格した。九州地方会からは新たに2名の専門医が誕生した。学会のロゴマークは、会員からの応募作品を特許庁に申請中であったが、昨年の暮れまでに無事登録が済み、次回1月の理事会で採用が正式に決まることになる。倫理検討委員会は10月末までに中間報告をまとめ、理事の意見を参考に1月の理事会までに作業を終える。その後は総会に提出し、一般会員からの意見などを聴取し、最終的な修正が加えられる予定である。委員会からは、この委員会を常設委員会とする提案がなされている。学会の70周年記念事業の一つとして準備中の記念誌は、学会誌特集号として出版されることが決まった。日本災害医学会から両学会の連携を強める申し入れがあり、高田勗理事が窓口となって具体的な連絡を行うこととなった。作業関連疾患検討委員会の報告書の内、第6章の勧告の部分が修正され、学会誌に掲載されることになった。学会の会員数は引き続き増加中で、昨年10月15日現在7,170名となった。

平成11年度日本産業衛生学会九州地方会学会開催の御案内

学会長：上田　厚（熊本大学教授）
場　所：熊本大学医学部および楷樹会館（熊本市）
日　時：平成11年6月10日（木）夕方から12日（土）夕方まで

10日（木）	18:00～20:00	自由集会
11日（金）	9:00～12:00	自由集会／各種会議
	14:00～17:00	一般口演／指定講演
	17:30～19:00	懇親会
	19:00～21:00	自由集会
12日（土）	9:00～12:00	一般口演／指定講演
	12:00～13:00	評議員会
	13:00～14:00	総会
	14:00～15:00	特別講演
	15:00～16:00	一般口演／指定講演

一般口演ならびに指定講演を申し込まれる方、あるいは、自由集会を希望される方は、会員各位に送付されます所定の書式にて、4月30日（金）までに郵送あるいはFAXにて学会事務局までお知らせください。

学会事務局（連絡先）
熊本大学医学部衛生学講座
平成11年度日本産業衛生学会九州地方会学会事務局
〒860-0811　熊本市本荘1－1－1
TEL:096-373-5106;FAX:096-373-5108;
E-mail:haradako@gpo.kumamoto-u.ac.jp
学会ホームページ；Http:www.　開設準備中

チェックリスト研修会 ―自主対応・参加型産業保健活動―
開催のお知らせ

主催者：日本産業衛生学会産業疲労研究会ならびに熊本大学医学部衛生学講座

1　開催日：平成11年6月10日（木）10:00～16:00
2　会　場：熊本大学医学部講義室および熊本総合鉄工団地（予定）
3　会　費：2000円
4　研修会の内容：実際の産業現場を対象として、グループワーク形式のチェックリスト研修会（自主対応・参加型産業保健活動の実地研修会）をおこないます。チェックリストは、日本産業衛生学会疲労研究会が、対策指向型チェックリストとして開発したものを用います。本研修会は、日本産業衛生学会産業疲労研究会と熊本大学医学部衛生学講座の共催でおこなわれます。
5　申込方法：参加希望の方は、会員各位に送付されます参加申込書の様式にて郵送あるいはＦＡＸにて、平成11年4月30日（金）までに事務局までお知らせください。

学会事務局（連絡先）
熊本大学医学部衛生学講座
平成11年度日本産業衛生学会九州地方会事務局
〒860-0811　熊本市本荘1－1－1
TEL:096-373-5106;FAX:096-373-5108;
E-mail:a－ueda@gpo.kumamoto-u.ac.jp
ホームページ　開設準備中

新役員選出さる！

九州地方会選挙管理委員会
委員長　三角順一
委員　伊規須英輝
委員　畝博
委員　福光ミチ子

去る９月25日に行われました日本産業衛生学会ならびに同学会九州地方会の平成11－13年度（任期３年間）の役員選挙の結果、下記の方々が新役員に選出され、12月26日の地方理事会で承認されましたので、ここに御報告いたします。

日本産業衛生学会役員

理事（３名）	大久保利晃	二塚信	田中勇武	
評議員（59名）				
福岡県	嵐谷奎一	伊規須英輝	池田正人	井上尚英
	今村幸子	畝博	大久保利晃	織田進
	加地浩	加藤登紀子	川本俊弘	神代雅晴
	小泉明	児玉泰	酒井淳	鈴木美代
	高木勝	高田和美	高橋謙	田中勇武
	永田頌史	服部泰	馬場快彦	日笠理恵
	東敏昭	福光ミチ子	藤代一也	藤原直子
	舟谷文男	保利一	的場恒孝	本川真弓
	森中恵子	山浦隆宏	大和浩	吉村健清
佐賀県	市場正良	友國勝麿	西住昌裕	
長崎県	竹本泰一郎	永田耕司	本山史子	
熊本県	上田厚	小山和作	二塚信	三浦創
	宮北隆志			
大分県	青木一雄	青野裕士	三角順一	
宮崎県	今里元輝	常俊義三	中村美恵子	
鹿児島県	青山公治	唐鎌ミキ	松下敏夫	
沖縄県	有泉誠	新城正紀	山城愛子	

日本産業衛生学会九州地方会役員

会長（１名）	大久保利晃			
理事（13名）	有泉誠	伊規須英輝	大久保利晃	酒井淳
	高木勝	竹本泰一郎	田中勇武	常俊義三
	友國勝麿	東敏昭	二塚信	松下敏夫
	三角順一			

『専門医試験に合格して』

浦上医院　院長　　浦　上　　裕

諸先輩方のお陰でやっと専門医の仲間入りが出来ました。

これまでに私の産業医の研究活動を御指導・御支援下さった諸先輩方に厚く御礼申し上げます。

私は卒後40年で開業医30年です。開業当初より産業医活動（主として定期検診）を行っております。当時は医師会員も関心が無く、産業医活動も低調で、産業医は検診医だと思う会員が多く、産業医講習会にも出席者が少なく、現在のような会場の大盛況は想像出来ませんでした。

現在、当院の外来患者は１日120名位でその内60名位が労災患者です。その内容は振動病・じん肺・一般外傷です。又、年間に振動病・騒音性難聴・じん肺約100名位の労災申請を行っております。昨年12月には冷凍鶏肉の作業員の指曲がり症の労災申請を行いました。結果（認定）はまだわかりません。

又、契約産業医として十数社で健診・安全衛生委員会・職場パトロールを行っております。同時に作業環境測定機関でもあるので、粉じん・有機等の測定を行っております。

船員法による日本人船員の健診、コレラの予防接種、同時に外国人（年間約100名位）の治療及び海上保安庁のヘリコプターによる洋上救急等も行っております。エイズ流行前には生々しいＳＴＤがありましたが現在は全く見当たりません。

地域産業保健活動としては、50人未満の事業所訪問を年間数カ所行っております。

現在、労働衛生コンサルタント（工学）に合格して、二次試験（口述）の為頑張っております。

以上、現況を簡単に書きました。

今後とも宜敷く御指導願います。

歴史的な教訓から学ぼう

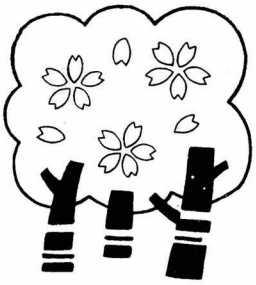
－職業・環境性疾患予防の歴史に関する国際会議開催さる－

松　下　敏　夫（鹿児島大学教授）

国際労働衛生協会（IOCH）の組織下の「職業・環境性疾患予防の歴史に関する科学委員会」（委員長：Prof. A. Grieco）が中心となって、第１回国会議が98年10月にローマで開催され、15ヵ国から約500名が参加しました。

会議では、開会式講演10題、特別講演10題のほか、一般演題として、職業・環境保健予防の開拓者たち、職業・環境性危害予防の史的展望・職業や環境の政策と法規の史的展望、予防に関する施設・団体と活動（起源と発展）、歴史的資料と記録等のセクションに分かれて46題の発表が行われ、その他、ポスター発表が31題、歴史的資料の展示等もあり、活発な討論と情報交換などが行われました。

日本からは、堀口俊一先生が「労働科学研究所と日本における産業保健の開拓者暉峻義等」を、私が「日本における農薬による危害防止に関する史的考察」について発表するなど、参加者５名が、それぞれ演題発表を行い、この会議の成功に貢献しました。そして、われわれが、現在から未来を見据える上で、歴史的教訓から学ぶことの大切さを、改めて痛感しました。なお、第２回国際会議は、2001年にスウェーデンで開催される予定です。



国際労働衛生会議－中間会議（ミラノ）に出席して

産業医科大学　高橋　謙

去る9月19－20日、イタリアのミラノ大学で国際労働衛生会議（以下ICOH）のMid－term meeting（中間会議）が開催された。現在ICOHの分科会には32のScientific Committee（以下SC）および3つのScientific Working Group（以下SWG）があるが、今回の会議では、ほぼすべての分科会から53名の代表が集った。日本からは、松下敏夫鹿児島大学教授（Chair,SWG on Allergy and Immunotoxicology）、荒記俊一東京大学教授（Chair, SC on Neurotoxicology and Psychophysiology）、大久保利晃産業医科大学教授（Chair,SC on Education and Training）と私（Secretary,SC on Respiratory Disorders）の4名が参加した。なお、大久保教授はICOHのBoard Member（理事）でもある。

ミラノはICOH発祥の地である。史料をひもとくと、ミラノでLuigi Devotoが世界で初めて産業保健の研究・予防・治療を目的とした組織－Clinicadel Lavoroを設立したのが1902年。ラマッツィーニが「働く人々の病気」を著してから実に約二百年を要している。同地でICOHが1906年にPermanent Commission on Occupational Healthとして設立された際に、Devotoらミラノ一派が中心的な役割を果したことは想像に難くない。ちなみにClinicadel Lavoroは1924年ミラノ大学設立の際に統合され、現在に至るまでUniversity of Mirano,Institute of Occupational Health,"Clinica del Lavoro L.Devoto"として輝かしい伝統を引き継いでいる。

プログラムは、バーミンガム大学のProf.Malcom Harringtonによる副会長就任演説等に続き、各SCおよびSWGの最近の活動状況が報告された。35もの分科会があるだけに、各々の歴史、会員数、国際会議の主催・共済状況、出版等の活動実績の度合いはまちまちであると言ってよい。執行部からはSCやSWGが国際会議の開催はもちろん、権威ある科学的知見の出版等を通じ、世界の産業保健の向上に対していそう貢献すべきであるとの強い期待が寄せられた。また2000年のICOHシンガポール会議へ向けての準備状況や方針などが話し合われた。シンガポール会議はアジアでの31年ぶりの開催となることもあり、今後、日本人が貢献できる余地は大きい。

ICOHは2000年にシンガポール、2003年にブラジル、そして2006年には一世紀を経て、多分、再びミラノに戻ってくる（立候補中）。このことから、ICOHでは2006年の会議をCentemmial Meeting（百年祭会議）と位置づけている。このような遠大な計画にイタリア人ならずとも、産業保健の片隅に身を置く一人として、少なからず共感を覚えることができた。

Ken Takahashi
Associate Professor
Dept.Environmental Epidemiology
University of Occupational & Environmental Health
Orio,Yahatanisiku
Kitakyushu City 807-8555,Japan
milto;ktaka@med.uoeh-u.ac.jp
FAX:＋81(Japan)-93-601-7324
TEL:＋81(Japan)-93-691-7454

学会報告

国際生物学的モニタリングに関するシンポジウム

佐賀医科大学　市場正良

これは産業医学領域における生物学的モニタリングの利用に関しての国際研究会である。第1回京都大会（92年）から今回が4回目となる。9月23日から25日まで、ソウルのカソリック医科大学を会場とし、35か国から、200名ほどの参加があった。当然、韓国や日本が多い。欧米からの参加者が少ない印象を得た。

演題数は、特別講演6題を始め、口頭発表63題、ポスター52題。その領域は、金属や有機溶剤を始め発癌物質暴露等のモニタリングの基礎的検討から調査事例まで多岐にわたる。我々は、分子生物学的手法の利用に興味があった。これにより従来、個人差としてあいまいにされていた部分が科学的に説明できると考えている。口頭発表での質問者は欧米人に偏るが、ポスター発表では、我々も貧弱な英語を駆使して有意義な討論ができた。これが、学会参加で一番充実できる時である。

韓国訪問は始めてであったが、ハングルが読めない以外、

町の様子は日本と変わらない。年上の人に親切なようで、教授は地下鉄で度々席を譲ってもらい感心していた。学会終了後、以前熊大衛生学に入学されていた金先生に、現勤務地である韓国産業安全衛生公団産業保健研究院を案内していただいた。彼は、ここの職業病診断センター主任研究員として活躍中である。また延世大学やソウル大学の産業医学関連の研究室も訪問できた。次回は、2001年にカナダのバンフで行われる。

九州地方会からの(ソウル参加者は、産業医大　川本俊弘・保利　一・加藤貴彦・有田尾　徹、佐賀医大　友國勝麿・市場正良・王　艶平、大分医大　三角順一・Wenyuan ZHAO の各先生方であった。

日本産業衛生学会指導医紹介

今回は126番から180番の方にお願いしております。（以下、指導医登録番号順に紹介）

久留米大学医学部環境衛生学教室
的場　恒孝（指導医登録番号126）

私は久留米大学医学部、同大学院（内科学専攻）を終えて、内科学、生理学、そしてまた内科学の教室と移って循環器学の教育・研究・診療に携わってきました。卒後20年目に予防医学である環境衛生学講座へ移り、同教室を主宰することになりました。ここでは臨床の目から見た予防医学、産業医学を打ち立てようと努力しています。

産業医としては、内科教室にいたころ小さな企業で数年間嘱託医をしていましたが、今いう嘱託産業医だったのです。それが実務経験です。今思い出すと現場を回って職場巡視もしていました。その頃は、その意識はありませんでしたが……。

産業医学が目指すことは、人々の長い人生の約40年間の健康保持増進を担当することであると思います。その前後には地域保健の時期があります。人生80年を一環して考えると、地域保健・学校保健との連係を保つことが大切になります。

今、不況の時代。失業率はぐんぐん上昇しています。産業医として就労時のみならず、失業時の健康にも気を回すべきではないかと思います。失業は一時期のことで、就労へ向かっての準備期間との発想が必要です。このような視点から、失業者の健康保持に地域産業保健センターが関与することも考える時期に来ていると考えます。

産業医科大学客員教授
高田　和美(指導医登録番号140)

昭和28年（1953）久留米医科大学卒業。三井産業医学研究所と九州大学衛生学教室で珪肺と赤痢を勉強しました。三井鉱山（九州・北海道）勤務のあと、昭和37年（1962）三井石油科学衛生管理室長、平成3年（1991）産業医科大学教授・産業医実務研修センター所長、平成9年（1997）退任して、客員教授になりました。

専属産業医時代は、衛生管理組織・交代勤務制・心とからだの健康づくりなどのテーマに産業保健スタッフとともに取り組みましたが、現在は生涯健康支援のための健康教育・保健指導とメンタルヘルス・ケアのあり方に興味を持っています。

平成9年に日本健康教育学会長、平成10年に日本産業ストレス学会長を経験しました。

日本産業衛生学会産業医部会長、産業保健九州会議世話人代表で、労働衛生コンサルタントです。

産業医活動は、自ら楽しんで進めなくてはと思っています。よろしくお願いいたします。

長崎大学医学部公衆衛生学
竹本　泰一郎(指導医登録番号172)

産業現場とのお付き合いは、大学院の学生の時に教室先輩の田中　茂先生（故人）が東京近郊のF電機工場で始められた棚卸し式健康診断を手伝いに行った時からです。毎日30人位の従業員を呼び出して健康診断をし、片方で診療もするのですから大学等からの応援が無ければ出来ないことですが、私達新米には従業員との面接・コミュニケーションの点で大変勉強になりました。

大学院を出てからテレビのブラウン管を作っている工場の専属産業医を1年弱しました。X線の漏洩防止のために鉛ガラスが使われるようになり血中鉛を測るために20mlほど採血してキエルダールで分解し始めたのですが、夕方大学に帰ってやるのではなかなかはかどりません。しびれを切らした従業員が他医を受診し鉛中毒という診断を貰ってきました。この事件は地域の鉛汚染というところまで大きくなり、地方紙に連日取り上げられ身のほそる思いをしました。もっと丁寧に説明をし、迅速に結果を返してやるべきだったと反省しきりでした。後年、自分が色々な検査を受ける身になると検査結果を待つつらさが判ってきました。

それから30年、東京、仙台、長崎と転々としてきました。

長崎では労働基準局の労働衛生指導医と監督署の職業病相談員として産業現場を時々拝見し、企業規模や経済状態によって産業保健レベルに大きな格差のあることを痛感しています。教室として土木部・農林部の県職員の振動工具取り扱い職場の健康管理をしていますが、道路整備とか草刈りといった作業が民間に外注されることが多くなっていきます。零細な民間企業でしっかりした健康管理をしてくれるのかやや不安です。改めて地域産業保健センターや推進センター活動の重要さを感じます。また、そうした活動を産業衛生学会の地方会或いは個々の指導医がどう支援して行くかもこれからの課題といえます。

大分医科大学医学部　公衆・衛生医学講座
青野　裕士(指導医登録番号176)

私は秋田大学医学部を昭和51年卒業後、直ちに大阪大学大学院（衛生学専攻　後藤稠教授当時）に入学し、モンタリングバッチ法を用いた低濃度の二硫化炭素の個人暴露濃度の定量化をテーマとして、暴露装置の開発とスフ生産現場での簡便な定量化に取り組みました。モンタリングバッチ法はその後職場環境が改善され、低濃度となった種々の有機溶剤蒸気の個人暴露量のモニターに有効なことも示されています。この間、東洋製罐大阪工場の産業医として、健康管理のすすめ方を実践する機会を得ましたし、大阪府公衆衛生研究所労働衛生部に所属して、大阪の中小企業現場で重金属や有機溶剤の作業者の個人暴露の定量を手がけました。昭和57年大分医科大学公衆・衛生医学（第１）教室が荒記教授により実質的に開講され、そのもとで特殊技能をいかしてキレート剤CaEDTAを用いた鉛その他の重金属の体内動態と尿中動員量の解析を行いました。また、各種の有害金属に暴露する作業者の金属および有機物質の体内蓄積と健康影響を尿中排出物質より評価・分析し、生物学的モニタリングを行うことの意義を知る事ができました。この間地域保健、疫学領域にも視野をひろげられ、日本人の主要死因の死亡率の動向とその要因を厚生省や総理府等による国レベルの統計資料をもとに多変量解析法を用いて種々検討をしました。大学院生のテーマのまとめでは、当大講座の三角教授にバックアップをしていただきました。また、これまで職域や地域での各種調査研究で小澤教授、大分の企業外健診機関、各種企業、労働衛生コンサルタントの方々のご支援や交流が得られることで指導医の資格が得られたものと思います。幅が広く奥深い産業保健の研究実践の場で、何らかの形で少しでも産業医の先生方のお役にたちたい思いでいっぱいです。

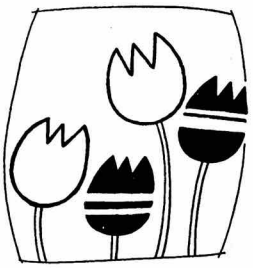
外国人会員の声

大学院終了を控えて

琉球大学医学部医学化保健医学講座
鄭　奎城

1987年７月に上海医科大学を卒業し、感染症の診断・治療を専門にしました。いくつかの追記でポリオが流行したため、EPIとポリオ根絶プロジェクトに参加し、さらに、WHOの専門家と共同で小児の炎症に関する治療および対策を行いました。この間に、地域社会における健康の保持増進を行うために、公衆衛生が重要であると強く認識しました。そこで、1991年に沖縄県公害衛生研究所（現、衛生環境研究所）で実施された公衆衛生コースにJICAの研修員として参加し、1995年4月に、琉球大学医学部保健医学講座の大学院博士課程に進学しました。昨年の11月に行われた学位審査にパスし、来る３月に無事終了の予定です。まず、４年間ご指導していただいた有泉誠教授はじめ教室の皆さんに感謝致します。化学物質によって誘発されるアレルギー疾患の免疫毒性学的メカニズムを明らかにするために、TDIによって誘発されるアレルギー性鼻炎、アレルギー性鼻カタルについて動物実験による研究を行いました。さらに、BALS/cマウスやWistarラットを用い、騒音曝露などの環境ストレスの免疫学的メカニズムについても研究を行い、これらの成果は内外の学術雑誌に掲載されることになっています。日本での研究は大変貴重な経験となり、研究から得た知能や技能は、今後の学術研究の仕事に生かしたいと思います。

日本での滞在期間中に、多くの方々に親切にしていただきました。私が滞在した沖縄は、人々が親切で、景色も美しく、楽しい学生生活を送ることができました。ご指導、ご鞭撻をいただい方々に衷心より感謝申し上げます。



産業衛生地方会史の編纂を終えて

担当理事　酒井　淳
（九州健康総合センター）

平成5年の理事会で、九州地方会史の編集委員長に石西先生、副委員長に三浦先生、事務局長に馬場先生が決まり、地方会史編纂の準備が進められていた。平成8年4月の理事会で、前地方会長の児玉先生にも副委員長を引き受けていただき、二塚先生と私が担当理事となり、平成11年の日本産業衛生学会創立70周年に合わせて作り上げることを目標に、具体的な編集作業を進めることになった。編集委員会で地方会史のまとめ方等にいて討議し、史料の収集、整理、原稿の依頼等の作業を進めた。

平成9年7月19日、先輩先生方に集まっていただき、鼎談を行った。松下地方会会長の作成した略年譜を骨子として、九州地方会諸先達の業績を中心にお話をしていただいた。諸先達の活動内容や、エピソード等にについて多くのことが語られ、予定時間をかなり超過した。特に玉井先生、野村先生は、わざわざ東京から出席していただき感謝している。鼎談のテープ起こしは、帰宅後、毎日少しづつ行ったので、予想以上に時間がかかった。馬場先生の協力を得て、原稿として出来上がった時には一安心した次第である。

平成10年1月17日、第43回労働衛生史研究会が、野村先生、松下先生を世話人として、福岡市で開催された。「九州地方における労働衛生活動の展開」のテーマで、黒田、川畑博士の業績（倉恒匡徳）、忘れ得ぬ先人たちの業績（野村茂）の紹介、鉄鋼業（元田紀雄、酒井淳）、鉱山業（馬場快彦）、造船業（橋本剛明）、化学工業（永利博美）の労働衛生活動が報告された。この研究会には、多くの九州地方会員の出席があり、地方会史の編集が促進された。

松下先生と二塚先生には、遠方より何度も福岡までご足労願い、平成10年末にようやく編集作業が完了した。

現在、初校が出来上がり、馬場先生を中心にに校正作業に入っている。執筆をしていただいた先輩、各県の地方会理事、歴代幹事の先生方をはじめ、ご協力をいただいた会員の皆様に心よりお礼申し上げます。

（平成11年1月29日）

広告を募集しております。御希望の方は、事務局まで御一報下さい。

編集後記

新緑の中に黄色い菜の花が眩しい季節となりました。会員諸氏には、御健勝にて御活躍の事と拝察致します。

平成11年度は役員交代の年で、新会長には産業医科大学の大久保利晃教授が選出されました。松下俊夫会長の御指導のもと、発刊された当『産衛九州』も第五号発行する事ができ喜びに耐えません。これも偏に御多忙中にもかかわらず御寄稿を賜りました会員各位の御指導、御協力の賜物と心より感謝申し上げます。平成11年度も新会長の下九州地方会の更なる発展のために会員一同力を合わせて頑張ろうではありませんか。開業の傍ら、64歳にして日本産業衛生学会の専門医試験に合格された浦上裕会員のチャレンジ精神を見習って。

（三角順一記）

九州地方会ニュース「産衛九州」

発行　平成11年3月31日

編集正責任者：三角順一（大分医科大学）
編集副責任者：馬場快彦（福岡産業保健推進センター）
編集委員：青木一雄（大分医科大学）
青山公治（鹿児島大学）
石竹達也（久留米大学）
市場正良（佐賀医科大学）
畝博（福岡大学）
大村実（九州大学）
新城正紀（琉球大学）
永田耕司（長崎大学）
日笠理恵（福岡県市町村職員共済組合）
前原正法（宮崎医科大学）
宮北隆志（熊本大学）
吉積宏治（産業医科大学）
（五十音順）

〈編集事務局連絡先〉
〒879－5593　大分県大分郡挾間町医大ケ丘1－1
大分医科大学公衆・衛生医学（Ⅱ）講座
（担当：青木，園田）
TEL(097)586－5742
FAX(097)586－5749